センター通信

（第５０号・記念特別号）

北京日本学研究センター　Tel:8424893　1996.1.5　責任編集：稲村哲也　呉咏梅

ニュース

◆１１月2日（木）～１５日（水）◇社会研究室の宋金文さんと社会科学院の林祀さんは常盤大学の招請により日本へ赴き、茨城県の農家や農協を訪問をした。彼らの共同研究のテーマは「中日における農村経済組織の比較研究」である。

◆１１月２６日（日）～１２月２日（日）◇徐一平副主任が一週間日本を友好訪問した。日程は以下の通り。１１月２７日ー２８日：人民日報と日本経済新聞が主催した第６回中日経済シンポジウムに参加。２９日：ソニー株式会社の本部を見学。１２月１日：北京市青少年日本語コンテスト試験問題集の出版と中国での中・高等学校の日本語教師養成などについて国際文化交流センターと相談。

◆１１月２９日（水）◇第２回目の文学文化研究会が開催され、北京の融和文化を理解するための「市内文化散歩」活動が実施された。研究室メンバー、センターの派遣教授及びその家族１０数名が興味津々に、道教のお寺「白雲観」、牛街のイスラム教の礼拝寺、イスラム教学院等を見学した。

◆１２月7日（木）◇今学期第２回の市民講演が基金北京事務所ホールで開催され、和田修一先生が「日本人の職業生活と社会意識ー日本的権威関係と社会秩序」というテーマで約二時間講演した。

◆１２月１４日（木）～１５日（金）◇北京日本学研究センター９期生修士論文審査が実施された。２０名の院生は全部合格できた。

今回の答弁は、例年と同じように、言語・文学・社会・文化と４つの組に分けて行われた。答弁委員は日本側２０名、中国側１６名という強力な教授陣から構成され、そのうちの１１名は国際交流基金により日本から特別派遣された。提出した論文と答弁の様子から見ると、今回の論文は、例えば５年前と比べ、かなり質が高くなった。特に社会コースの学生は問題意識が明確で、オリジナリテイがあると高く評価された。全体からみれば、そのまま日本の雑誌に載せられるような優秀な論文もあれば、独自性のない論文もあった。

◆１２月２７日（水）午後２：３０◇北京外国語大学外事処によって主催された新年の招待会が老舎茶館にて行われた。当センターの派遣教授及び家族２０人が参加し、お茶を賞味しながら北京の伝統芸能を満喫した。

◆１２月２９日（金）夜７：３０◇国家専家局主催の新年音楽会が海淀劇場にて開催され、センターの派遣教授及び家族がコンサートを鑑賞した。

◆１９９６年１月２日◇山極先生が入院先の中日友好病院を無事退院した。

◆１月４日（木）◇秋学期終了◆夜６：００◇北京外国語大学一階の専家食堂にて９５年度秋学期派遣教授のための歓送会が行われた。

＜記念特別号・主な内容＞

特別寄稿：◇北京の冬・春節 ―― 竹内 実
◇机場へ ―― 岡野道夫
◇訪日帰国後の感想 ―― 周 維 宏
中国女性の生き方：◇中国の女性--祖母の人生 ―― 社会コース２年 余 燿 寧
◇私の教育歴--女性として、教育を考える ―― 社会コース２年 王 傑
研究ノート：◇日中合弁縫製工場訪問記 ―― 駿河輝和
◇定年退職者家族の調査から ―― 和田修一
◇現代中国の家族と宗族：学生からの聞きとり調査 ―― 稲村哲也
センターの教育を考える：◇人文学の目的と評価について：1995.12.17 ―― 三谷 博
◇「独創性」について ―― 浅野純一
◇センターへの提言：1996.1.5 ―― 三谷 博

＊＊＊北京の冬・春節＊＊＊

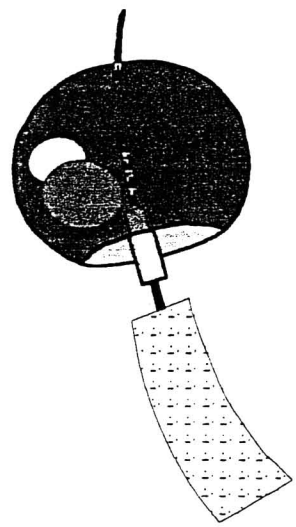
竹内実

はやいもので赴任して一年以上たった。赴任したときは九月で、やがて白楊の葉がからからと音をたてて落ちるさまは、壮観だった。風が渡ると梢の枝と枝がうちあい、落葉と落葉がぶつかりあい、乾いた音をたて、風そのものも樹々の高いところを嘯いて渡ってゆくのである。そのあとやってきた冬も、きびしいものだった。ようやく春がきてホッとしたが、センターの十周年行事を秋にひかえていたこともあって、あまりのんびりした気分でもなかった。

最初の冬に比べると、二度目の冬はらくだった。いちど強烈な風が吹いたことがあり、賓館正面の大きな植木鉢が吹き倒されたほどだった。それも過ぎてしまえば、なんでもない。心臓が不安定なのはあいかわらずで、なるべくゆっくり歩くことにしているが、いつも不安定だというわけではないので、太陽が照っている昼間は、暖かく、気分もはればれとする。

友誼賓館と外国語大学を往復するだけの毎日になり、ほんとうに北京にいるのだろうかと自問自答するときもないではない。去年の一月二日には「憶苦思甜大雑院飯荘」という田舎料理の店に数人ででかけていった。昔の苦しみをしのび、いまの幸せをかみしめる「憶苦思甜」が屋号になっているだけあって、蟻とか蝉とかいもむしとか。とうもろこしのスープも、しんを粉にしたものであった。そのあと、白塔寺にいったが、あいにく休日だった。それで、先々月だったか、あらためてでかけたのだったが、白い巨大な塔の頂上、華蓋につりさげられた風鈴がいい音をたてていた。

土地のひとは風鈴といっている。わたしは風鐸というのかと思っていたのである。いくらか、われわれが秋につるす風鈴に共通する音色ではあるとはいえ、チリンチリンではなく、カランカランである。想像以上ににぎやかな音だった。



春節の一月三十一日は快晴だったので、春節の市（いち）にでかけてみようと思って、面的を拾い運転手に市か景山公園につれていけというと、景山がいいという。途中、話していると、もう十二年景山にはいったことがない、という。また話していると、いまの奥さんと十二年前、景山にきたという。子供が十二歳になるという。幸せな家庭なのだった。帰路、やはり面的をひろうと、運転手は、北京人にとっていかに春節がだいじであるか、春節をどのようにすごすか、語った。能辯だった。

このようなひと、味、にであうことができるのも、こうして北京に滞在しているからで、たまの旅行の短い日程では、なかなか難しい。今年の春節は二月十九日だから、太陽暦の正月からいうとずいぶん遅い。遅いぶん、土地のひとは、ゆっくりたのしむのではないか。

＊＊＊机場へ＊＊＊

岡野道夫

北京空港を発進すると我々を乗せた小型バス（「北京日本学研究中心」と腹に文字があるバス、こののちどれほどこの車に世話になったことか）は、きわめて整備された高速道路を市の中心部にむかってひた走る。とうとう北京にやって来た。のちにこの道を走るたびに何度も感じた気持ちだ。この年は日本で想像してしていたよりずっと暖かく、片側三車線（両側六車線）の道はかなりゆったりとってあり、両側に見事なポプラ並木の大木がそろっている。二月末のどんよりと鉛色をした冬空を背景に黒々とした大木の並木のシルエットがどこまでも続く。末端の細枝は針のように天を突きあげ、並木の背後は平凡な田園風景が広がり、霞の中に沈んでいる。バスの走行にまかせて並木を見ていると二十本に一本程の割合で、枝の股の付け根のところに黒いかたまりが見える。鳥の巣だ。コウノトリの巣と思っていたところ、後で聞くと”喜鵲”という鳥の類だという。のちに友誼返賓館の”頤園”や”雅園”の庭でたびたびその姿を目にした、頭部が黒く、体の一部が鮮やかな青で、尾長のように尾が長く、それよりやや大型の鳥だ。その名前からも知られるように瑞鳥ということだが、姿や名にくらべて泣き声は”グェーグェー”というものでいただけない。賓館の庭の白楊の大木の樹上にもよく巣を作っていた。

さて、上記の高速道路は北京空港（「机場」）から「三環路」の東北隅「三元橋」まで十八キロの道のりだが、文字通り北京の顔で、新緑・青葉・紅葉・裸木と四季折々の装いをこらしてここに来る客を迎えている。羽田方面や成田への道とくらべるとはるかに首都空港への玄関口という風格を保っている。

数度の空港を利用する国内旅行、家族や友人の送迎で、何度かここを通った。そのたびこの道は表情を変える。この道は机場からさらに延びて順義、懐柔（ここ机場より先は２～１車線となり槐<えんじゅ>の並木が初夏ともなると空を塞いでいる）という郊外の市街地から密雲に続いている。密雲水庫（ダムで造られた文字通り北京市民のための水甕の一つだ）は地図で想像していたよりはるかに巨大で、白龍潭、黒龍潭などの景勝地を含み、四季折々その姿を変える。密雲水庫を車窓にしながら小一時間も行くと古北口という「長城」のしっぽがある。その側をすり抜け、山超えをくり返しつつ、清朝の夏の避暑地である承徳まで行ったことがある。湖の青、土の黄色とともに初夏の緑のやわらかな色が忘れ難い。

北京の北東へ延びる道が「机場」への道とすると、東三環路を南下し分鐘寺橋から南東南東へ向かう道が天津へ通ずる高速道路だ。ここも六車線のゆったりした直線路で、両側の並木はやや後方に控える。したがって眺望はかなり良い。一望平坦な畑に水路や湿地帯が散在する。そこに水鳥が遊ぶ光景を見ることもあるが、道路の風格からすると机場への道には及ばない。

もう間もなく机場への道をたどり、裸となったポプラと鳥の巣に見送られて帰国する日も間近い。

＊＊＊訪日帰国後の感想＊＊＊

周維宏

私は帰ってきた。去年の１１月２０日から今年の１１月２０日まで、私は国際交流基金の招きでフェローとして日本で一年間勉強と仕事をしてきた。この一年間の収穫は少なくないものであった。９１年の年末から９２年の初頭、中日友好協会の副会長肖向前先生ら一同と一緒に中日関係史研究者訪日団という名義で日本を訪問したことがあった。その時は、仙台、鹿児島、福岡、佐賀と北から南まで日本列「国」を一周したので、今回は旅行の計画を一つも立てなかった。そのかわりに「観光」の重点を関東地域にある日本の大学や図書館においた。

私の根拠地は東京から百キロくらい離れる「水戸黄門」にある（私は常磐大学人間科学部社会調査研究室の客員研究員）。研修期間中、私は日本の農村を歴訪し、日本でも最も貧しい農家（筆者個人の判断）を訪問したこともある。また早稲田大学文学部の安在教授のお世話で、特別研究員の身分で自由に早大の中央図書館を出入りすることができた。茨城大、筑波大、國學院大學へも通い、おおぜいの友達を作った。彼らのご支援のもとで、この一年間で私は基本的に「戦後における中日関係史についての研究（共同研究）」、「中日における農村経済組織の比較研究（共同研究）」、「戦後中日における農村工業化の比較研究」という３つの課題の準備作業を終え、来年度の２冊の著書の出版のためによい基礎を築けたのである。

「水戸黄門」は私にいたせりつくせりの世話をしてくださった。歓迎歓送のレセプションをしてくださっただけでなく、２ＤＫのマンションと一人部屋の研究室を提供してくださったのである。条件は国内と比べようもない優れているものであった。もっと感動させられたのは、夜学習後階段を下りて休憩したら、舎監のおばあさんがいつも紅茶とお菓子を用意してくれることである。もう一人、学舎の近くに住んでいる８０代の老者とは、時々道端で会って挨拶したり、中国文化について簡単に話を交わしたほどの交際だが、帰国する前に、この老先生がわざわざ古い習慣に従って「餞（銭）別」と記したお手紙を東京の私の宿舎まで送ってくださった。

水戸には日本の３大名園の一つと賞されている「偕楽園」がある。帰国する前に来日中の宋金文氏、林昶氏と一緒に見学にいったのだが、惜しいことに有名な「梅景（梅の景色）」は賞味できなかった。しかし、今回の日本行きでは、一番最新型の８ミリビデオカメラを購買し、私の個人愛好が満足できたのである。このビデオカメラで、日本の行政、司法、立法という三つの官庁の外回りの景色や早稲田大学の学園紛争について、６×１２０（分）のビデオを撮ったが、この二カ所では、警察や学生の自治会に詰問され、弁舌したところが、「特務」や「内姦」として扱われなかった。総じていえば、私は「一把癒隠（影）」をすることができたのである。

注：一把癒隠というのは何かをすることで自分の欲望が十分に満足できたの意味。影は普通撮影のことを指します。ここでは「ビデオがとれた」という意味。

中国女性の生き方＊＊ 中国の女性--祖母の人生 ＊＊社会コース２年　余燁寧

母方の祖母は今世紀の20年代に生まれ、男尊女卑の意識が極めて強かった封建時代から歩んできたのである。「わたしのこの一生は三分法ですと、三分の一は旧中国、三分の一は政治運動、残る三分の一は平和時代」と祖母がよくいうように、その人生のそれぞれの段階はいずれも各々の時代の色合いをつけられている。祖母の人生を読むのは、中国の女性史を読むごとく、わたしにとっては大変興味深いことである。それとともに、中国の女性を理解するひとつのきっかけでもある。

＊＊＊＊＊＊

解放前の中国は、女性には「三従四徳」が厳しく要求され、「女子、才なければすなわち徳」という社会であった。女性に対するしつけはやかましかった。女は苦しみながらも纏足をし、耳飾りを着けてきた。足が大きければ嫁入り先がなかったから、足が大きくならないように、女の子はまだ幼い頃から纏足の布で足の指を曲げられ、堅く縛りつけられた。「歩み運べば蓮の花咲く」というふうに身奇麗にすることが要求されるので、いくら痛くても我慢しなければならなかった。

男尊女卑の考えが強すぎるため、当時の女性のほとんどは文盲であった。女性には学問は無用で、家事に関する教養こそ強調されていた。小さいときから女性は料理・裁縫・刺繍などを習得した。

結婚の適齢期に入ると、「父母の命」、「媒妁の言」によって婚姻が結ばれた。結婚前の男女の交際は禁じられ、恋愛の生まれる機会も極度に制限されていた。　嫁に行ったら夫に従い、不幸は婚姻でも耐えることが美徳とされていた。「夫唱婦随」、「鶏に嫁すれば鶏に随い、犬に嫁すれば犬に随う」ということわざの言うように、いい亭主に当たればいいが、悪い夫のところへ嫁いだらまさに運の尽きということになった。

嫁入り先である婚家において、親子水入らずのへだてのない生活の中に嫁が入ってくると、家族成員はそれぞれの立場からいろいろな感情をもち、新来の嫁の振る舞いに対していちいち批判の目で見るようになった。それゆえ、嫁はその人達の仲間入りができるまでには、長い時間がかからなければならなかった。多くの試練や苦しみをうけねばならなかった。嫁と姑との同居生活が行われるのが一般的であったが、もともの夫婦の支配服従関係で不平等な地位におかれた嫁はさらに舅姑に仕え、婚家に絶対服従せざるをえなかった。嫁には家計の自由はなかったし、料理など毎日のなすべき仕事に四苦八苦した。いかに舅姑や夫を喜ばせるか、それは相当苦労なことであった。

女性は男の子を生んで母となってはじめて一人前として認められ、その女性も強くなった。姑になると今度は嫁に対して強い立場に立ち、厳しく要求した。しかし、もし女の子ばかりを生めば、その女性は頭が上がらないほど、家族や近隣の人々にいじめられた。「女は損な品物」とされていたから。

中国の伝統的な女性のライフサイクルはだいたい以上の通りである。

＊＊＊＊＊＊

祖母の人生コースはこのような伝統的なものとは言えない。むしろ逸脱していると言っ

た方がふさわしいかもしれない。

祖母は「重男軽女」（男を重んじ、女を軽んずる）という雰囲気の濃い家庭に生まれ育ったのであるが、子供のときから聡明で美貌の持ち主だったので、たいへんかわいがられていた。纏足されるはずだったが、上海の大学で西洋式の新しい教育を受けていた一番上のお兄さんが必死に反対したので、祖母は自由に歩けない悲しい運命から逃れることができた。祖母は今でも同世代の女性のなかではめったに見られなかった「天足」に誇りをもっている。わたしは小さい頃、纏足した老婆を見たことがあるが、その「三寸の金蓮」（足が三寸ほど長いことのたとえ）に好奇心をもちながら、かわいそうだと思った。もし祖母がそのようだったらどんなにつらいことであろうかと、想像もできなかった。

そのお兄さんのおかげで、祖母は纏足しなかったばかりか、学校まで行くことができた。何年間かの学校生活を送った祖母は、７５歳を迎えつつある今でも読書の習慣を保ち続けている。寝る前に必ず３０分ぐらい本を読む。とくに中国の古典文学作品を好み、「紅楼夢」、「三国志」、「水滸伝」などいずれも何度か読んだことがある。祖母の記憶力は人を驚かせるほどよくて、どんな厚い本でも、それを読みおわったら、自分の想像を加えて物語風に明晰に繰り返すことができる。

母の実家にあずけられたとき、宿題をすませたあと祖母に物語を聞かせてもらうのが当時のわたしのもっとも大きな楽しみとなった。わたしが本を読むことが好きになったのは祖母のおかげだった。夜に祖母とわたしが差し向かいに座り、静かに本を読んでいるシーンが、わたしの頭に焼き付いている。いつになってもこうした懐かしい光景に心を打たれる。

祖父に嫁いだとき祖母は２０歳をすこし越えたばかりだった。習わし通りの見合い結婚でだった。山東省出身の祖父は祖母より７、８歳年上で、当時国民党の空軍部隊の技師であった。一番目の妻に死なれてひとりぼっちだった。南方の人で性格があわない人と結婚したら幸せになれるかなと心配しながら、祖母は祖父の嫁になった。決めるのは家長だったため、考える余裕はなかった。幸いに、祖父は祖母を深く愛してくれ、ふたりの間はなかなかうまくいった。結婚後、祖母は実家を離れて随軍家族として祖父に従った。仕事の関係で、祖父は国民党の全国各地にある飛行場に常にまわされ、転勤は頻繁だった。祖母は祖父のお供をして、北はハルピン南は福州まで、西の重慶から東の上海に至るまで、たくさんのところで生活した。女性に「足が戸を出ず」ことが要求された時代には、それはかなり珍しいことであった。普通の伝統的な女性よりも視野も広く気も大きい祖母となったのは、その豊かな経歴の賜物ではないかと思う。幸い、祖母は天足であった。

祖父が早くから大家族から逃げ出して軍人になったため、祖母は舅姑と同居したことがなかった。そのせいで、嫁としてのつらさ、苦しさを一度も味わったことがなかった。もしほんとうに婚家でその成員と同居したら、個性の強い祖母はきっと満足できなかったであろう。嫁としての役割を果たさないばかりか、三人の娘をもった母は、ゆとりのある生活を送っていた。国民党の軍官であったため、祖父はずっと高い俸給をもらい、相当豊かな生活を支えることができた。祖母は職業ももたずに悠々と満ち足りた生活をした。そして、貧しい人を助けることがよくあった。

しかし、1949年解放の直前、不幸がおこった。祖父は部隊と一緒に台湾へ撤退した。当時、祖母は子供連れで里帰りをしていた。祖父が上海へ母子を迎えに行くと約束したが、間に合わなかった。まもなく新中国が成立したので、祖母はとうとう台湾へいくことができなかった。そのときから、台湾海峡は肉親の連絡を遮っている。

母は、わたしたちに祖父のことを聞かせると、いつも目に涙をためる。姉妹の中で、祖父は長女であるわたしの母を特にかわいがっていた。大きくなったら医者になってもらいたいという希望をいだいていたそうである。後に祖母は母に高等教育を受けさせ、母は祖父の望んだ通り医者になった。

解放以後の何十年間、政治運動が相次いで行われ、祖母の心身ともに大きな衝撃を与えた。生活の重荷を背負わされた祖母は家計の足しに、職場に出て働かざるをえなかった。ひとりの力で子供たちを育てるために何とか立ち直ろうと努力した祖母は、苦労を積み重ねて、世間の辛酸をつぶさになめた。

豊かな家庭でいつくしまれ甘やかされた子供だったが、一夜にして「台湾スパイの子孫」となった母の三姉妹は早くからよく祖母の手伝いをし、家庭の不幸を分担した。特に「文化大革命」の時期に、祖母は、祖父が台湾にいたので「反革命」と見なされ、ひどい迫害を蒙った。その時代のほかの多くの家庭と同じように、祖母の娘は三人とも家から遠く離れた貧しいところへ「下放」され、ひとつのまとまった家族はばらばらになった。こうした惨めな状態がほぼ十年間近く続いた。「いくら難しくても、どんなことがあっても頑張らなくちゃ」。辛抱強く生き抜く力をもっている祖母の影響の下で、母姉妹三人とも負けず嫌いである。楽観的で自信にあふれた強い意志は母方祖母の影響を受け継いだものらしい。

世の移り変わりをいやというほど経験した祖母は今、元気で穏やかな余生を楽しんでいる。その苦労のしわが刻まれた顔を見るたびに、思わずわたしの心の底から尊敬の意が湧いてくる。祖母の人生を読むのは、中国の女性の百科事典を読むのと同じではなかろうか、わたしは常にそう思う。

中国女性の生き方＊＊＊ 私の教育歴--女性として、中国の教育を考える＊＊＊

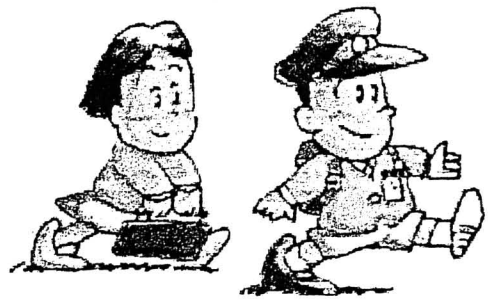
社会コース２年　王傑

小学校で（１９７９－８４）

小校学校での生活は楽だった。一年、二年では数学、国語、体育、音楽、美術の授業しかなかった。殆ど幼稚園で習得したものばかりなので、不勉強でも、いい成績を上げられた。先生が「できる子よ！でも、いたずらな！」と、いつも親に笑いながら文句を言っていた。確かに授業中、ときどき隣のクラスメートにこっそり声をかけたりした。先生に見つかって、しかられても、全然気にしなかったらしい。学校で思い切って遊び、放課後よく道草を食った。親にしかられても、「大丈夫よ！ずっと一番じゃないか？」といったりして、生意気だった。

三年生の時、地理学、歴史学、自然学の授業も開設された。それでも、勉強で骨を折ることなんか殆どなかった。しかし、科目の好き嫌いがはっきりした。数学が大好き、とけ

ない問題ないみたい、難問が好き。国語が嫌い、暗誦が嫌い、作文が大嫌い。作文の時間に、半分遊び、小説なんかに目を通し、しようがない時間になると、ちょっと考えて、さっさと書き上げ、出してすむぐらいだった。



カリキュラムの設置には男女の差は全然なかった。女子生徒ができる。男の子ができても、せいぜい四番か五番ぐらい。しかし、男女の差というと、少しだけ意識した。運動会の時、男子グループと女子グループが必ずはっきり分けられている。同じ足かけなのに、男子なら１５００メートル、女子ならせいぜい８００メートル。なぜ違うか考えたことがない。当たり前なことだなと思っていた。もちろん女の子が弱いものなんて全然思わなかった。

中学校で　（１９８４－８７）

中学校になると、授業も科目も増えた。一年生の時、数学、国語、英語、政治、植物学、地理学、歴史学、それから体育の八科目が開設された。二年生になると、植物学の代わりに動物学と物理学が増設された。三年生に進級すると、地理学と歴史学が終了、生理学と化学が新設されるようになった。一週間六日通学、一日に六あるいは八時間の授業に出なければいけなかった。しかし、教科書の内容がわかりやすいせいか、そんなにたくさんの科目とコマ数があっても、難しくて理解できないほどのものがほとんどなかった。依然として数学が得意、国語より英語の方が好き、物理学と化学がよくできた。

うちのクラスでは、やはり女性が優秀だった。カリキュラムの設置には、男女の差は依然としてなかった。生理学で一回だけ別々にやった。その日は生殖器官の授業だった。が、私にとって、神秘とかおかしいとかちっとも思わなかった。そうすべきだなあと思うほかなかった。

中学校の三年間でなぜか音楽と美術の科目が開設されなかった。それが自分の人生に大きな不足になっているではないかと思っている。

高校時代　（１９８７－９０）

１９８７年地元で一番有名な高校に合格した。その時から、自分より優れた人がかなりいるなとわかるようになった。できる男の子もやっと目にした。特に一人の区君という子が、毎日遊んでいるのに一番から落ちたことがなかった。ずいぶん感心した。進学競争が激しいので、十五、六歳の少年少女でも異性間のつきあいがけっこうで、異常なかった。みんな一気に猛勉強していた。「がんばれよ、落第なんてしないでよ」と時々先生や親からくどくど言われた。勉強だけでもう大変だから、家事の手伝いをしなくても親からしかられることがなかった。

高校二年になると、文科系と理科系の分科が決まっている。私としては理科系の科目、化学や物理学や数学の方が好きだったが、分科指導の時、「オウケツさんはね、文科系の方がいいよ！」と学級長から勧められた。「でも、ずっと理科が好き、そして数学も化学も得意だし、先生なぜそういうの」と聞きかえせすと、「女の子のせいよ！大学進学の時

になると、きっとわかる。女性として、大学の理科系に入ったらたいへんよ。就職の場合、もっとたいへん。とにかく親と相談してみましょうか」。親と相談した結果、嫌々ながら文科系を選択してしまった。いまもう一度考えてみると、それが自分の人生にとって大きな変わり目だなあと思っている。好奇心や趣味はたしかに植え付けることができるけど、自分の興味にあわないものを学ぶことはどう言ってもつらいことだ。いまになっても、文学や文化に対して深い興味を持つまでとはいえない。

大学時代　（１９９０－９４）

大学に入って外国語学部の日本科を選んだ。日本語についての授業を除くと、せいぜい体育や現代中国語、政治などの科目しかなかった。他の学部の授業を選ぶのが許可されていない。日本語に興味を持たないクラスメートが毎日遊んでばかり、正に不本意就学であった。私としては、学ぶうちにだんだん好きになって、よかった。言語の勉強は女性が優秀だった。しかし、就職の時、男性が先に採用され、女性がいかに優秀でもその後に採用された、ということが印象深かった。にもかかわらず、大学で様々なことを身につけた。テキストの習得より、人と人のつきあいや独自の考え方の形成ができるようになりはじめた。一生涯にとっても、もっとも大事な四年間だ。

教育システムへの疑問

教育の各段階での科目設定の不合理さ。音楽と美術の授業の質が低い。実習授業を欠いている。詰め込み式の授業で、学生の創造性があまり重視されない。暗記偏重。教育が受験向きに偏っている。大学の段階でも、学部を越える科目の選択を自由にできない。一口にいえば、教育システムがすでに硬直化しているといえよう。

また、男女平等が主張されるが、中国では男女平等というまでには至っていないと思う。大学まではそういう言い方にだまされたが、いま考えてみると男女平等は設置科目の共通性というような形式的なことだけだった。初等教育ではむしろ、男女差を考慮した過程設置も全く必要ないとはいえない。

研究ノート＊＊＊日中合弁縫製工場訪問記＊＊＊駿河輝和

1995年１１月６日（月）北京日本学研究中心の村松久良光教授、大学院生の李玉芳君、卒業生で現在専業主婦の丁梨さんと私の４人で、北京市延慶県のある日中合弁縫製企業を訪れた。私が北京に到着した翌日である。友誼賓館タクシーの運転手と李君が延々と値段の交渉をして４００元で交渉が成立した。万里の長城の八達嶺を超えて２０分ぐらいの所にこの工場はある。この会社は、延慶県の所有する郷鎮縫製企業と日本の九州に本拠のあるスーパーとの合弁企業で、元の企業の従業員は全て新会社に移っている。丁梨さんの夫が関連会社（このスーパーの子会社）の総経理（社長）をしている関係でこの工場を訪問することができた。

資本金は1、200万元、その内地元資本65%、日本側35%の構成である。1991年に合弁の契約をし、1993年９月１５日に開業している。91年当時従業員は３５０人であったが、現在は職工６００人、管理・事務・技術職員６０人である。職工６００人の内女性は

５２０人で８７％を占めている。生産の８０％は日本への輸出で、いくつかのスーパーが主たる顧客である。日本以外はアメリカ、ロシア、香港への輸出で、国内市場向け製品はほとんど生産していない。生産品は、ジャケット、ワンピース、上着、コート、ズボン、ショートパンツなどである。

第２回目は、１２月４日（月）日本学中心の和田修一教授、李玉芳君、院生の余慢寧さんと私の４人で、１回目と同じ運転手の車で訪問した。余さんは行きも帰りも車に酔いっぱなしでふらふら、その翌日は大学の授業を欠席するという有り様。本当に気の毒なことをした。途中八達嶺で車を降りたが、コート無しの背広姿のせいもありその寒さには閉口した。その寒さの中で、多くの人が八達嶺の長城を登っていたのには感心した。

１回目は主として総経理に、２回目は総経理と経営部の人に話を聞いた。２人ともこの会社に職工として入った女性である。李君が通訳を勤め、１回目は丁梨さんも内容の補足をしてくれた。

総経理は３８歳、勤続年数１９年である。1976年にミシンの現場職工として入社、保管員、生産課長、財務会計係を経て83年に生産副工場長に抜擢された。工場長の選挙に立候補、工場長に選出され89年から工場長を勤める。工場長の選挙には工場の内部および外部から４、５人が立候補。選挙運動の後、県の工業局に各職場の代表が出席して投票で工場長を選出した。

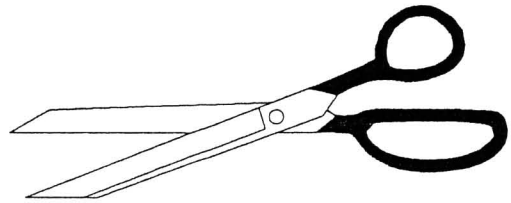
経営部のＡさんは、勤続１３年。アイロンの職工を３年間したあと主任になる。主任を７、８年勤めたのち生産部長。配置転換で経営部に来た。

聞き取り調査した内容は多岐にわたるが、ここでは車間（機械作業の単位職場）の構成、昇進、賃金、労働時間、日本との合弁によって変わった点を紹介したい。

現在の一車間の構成は５、６０人で、設備は国産ミシンが３４台、日本製ミシンが１０台である。アイロン係が３人ぐらい。一部屋にミシンが２列に配置されている。主任１人、組長２人、品質管理者２人がいる。昇進は同じ車間からの内部昇進がほとんどである。ミシンの職工は易しい仕事から入り、難しい仕事へと移る。技能のいるキー持ち場は、袋、襟、袖付けの部分である。こういったキー持ち場を経験したベテランが品質管理者へと昇進する。経営部のＡさんが入った頃は一車間は２４人ぐらいで組長や品質管理者の制度はなくすぐに主任になった。主任の業務は、人員配置や分業配分を決めることであり、組長は欠勤者の穴埋めで作業に入ったり新人の訓練をする。新入職工は最初の３カ月間仕事につきながら訓練を受ける。この間に教えるのは主に組長である。

職工の平均賃金は４００元前後であまり高くない。品質管理者はその１．１倍、組長は１．２倍、主任は１．４倍である。賃金はその車間の出来高に加工賃を掛けたもので決まる。ちなみに、見学をしたときの製品では、日本向けのジャケットの加工賃がが１着３ドル、日本向け女性のジャケットとミニスカートのセットが２ドル前後、ロシア向けジャケットが１５元であった。仕事に関する賃金が９０％であり、残り１０％は物価の上昇などへの手当である。ボーナスは無い。勤続給は、１年たつと月１０元、２年で１５元、３年で１８元、４年で２０元、その後１年で１元づつ増えてゆく。５、６年勤続の人で賃金は高くて４５０元、個人差は１００元ぐらいつく。職場に入りたての人は、最初の３カ月

間は訓練期間で、賃金は平均賃金の７０％。３５％は工場から支給され、残りの３５％は出来高に応じている。北京市で決められている最低賃金は２４０元で、それを下回らないようにしているとのこと。参考までに、1995年１１月８日の人民日報（海外版）によると、統計局は1995年１月から９月までの全国城鎮職工平均賃金を３８９元と発表している。



労働時間は、名目では午前８時ー１２時、午後１時半ー５時半となっている。しかし、実際には忙しいときには午後８時ぐらいまでの残業は普通。休みは忙しいときとそうでない時によって異なる。忙しいときにはほとんどない。一年では春節のときに１２日間まとめて休む。忙しいのは、１２月から１月までと６月から９月までである。

辞める人も結構多い。この県の人は北京の市部では働くことができない。したがって、地元のサービス業などに転職してゆく。欠員は職工や職員の知り合いを入れたり、公募して採用したりする。

日本企業と合弁することにより変わった点は次のような点である。

・前に述べた組長や品質管理者の制度の充実。また技術部の要員は７人から１４人に増えた。

・日本からの品質に対する要求が厳しく、技術が向上した。日本からの派遣技術者は最初は２人であったが、現在は１人である。日本技術者は常に工場を回って注意を与えているとのこと。

・車間の衛生状態が非常に良くなった。窓が大きく明るくなり、床のゴミも減った。

・針の管理も厳しくなり、壊れた針と交換でしか新しい針がもらえなくなった。

日本の紳士服メーカーがやはり北京で合弁企業を作っている。日本側から見た合弁企業の技術力について少し話を聞くことができた。紳士服の場合は手縫いの部分も多く、先のミシンだけの縫製工場に比べより一層の技術が要求される。日本の技術者が相当うるさく注意してなんとか日本で売れる商品ができる。しかし、日本の技術力に比べると相当落ちるとのことであった。北京は乾燥していて、日本は湿気ているため、糸と布の伸び方が違うため不都合が起きる。このため作業室の湿度を高めて製品を生産してこの問題を解決している。

集計された統計データは、全体的あるいは平均的傾向を知るのに便利である。それに対し、聞き取り調査で得られたデータはそれがどの程度一般性を持つかという問題点はあるものの、具体的で集計データでは消えてしまったものが見えてくる。中国は今のところ公表統計データが少なく、信憑性にも問題があり、かつ平均値の持つ意味がもう一つ不明確な国である。また個別の具体的情報も入手が限られている。こういった状況下では、前述したような聞き取りによるデータを何らかの形で公開して蓄積し相互に突き合わせることが、中国の社会経済の状況を分析する上で非常に重要となってくるだろう。

研究ノート＊＊＊定年退職者家族の調査から＊＊＊和田修一

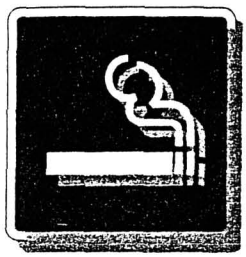
1992～93年にかけてアメリカ合衆国のオハイオ州に滞在していたとき20数名の高齢者の方にインタビュー調査を行ったのですが、今回の北京滞在中にもなんとかこういったインタビューができないものかと考えて、インタビューに必要なビディオ・カメラの機材一式を携帯してきました。私は中国語は全くできないものですから、インタビューに応じてくれる方の手がかりもないまま１ヶ月あまりがアッというまに過ぎてしまいました。そうこうしているうちに、全く幸運なことに、早大を卒業して北京外大に留学している学生にパッタリ出会い、私が考えているインタビューに協力してくれる快諾をえることができ、さらに彼女が日本学研究中心の２年生と親しかったことから、日本人と中国人の２人の協力者を同時にえることができ、10月に至ってインタビュー調査を行うこちら側の体制が何とかできた次第です。

そこで次に解決しなければならない課題は、どうやってインタビューの対象者をみつけるかということですが、この件に関しては行き当たりばったりの無手勝つ流で当たることにしました。つまり、ご承知のように中国の高齢者は朝早くから公園等で健康管理のための体操を集団で行っていますので、まずはその方々の実体に当たってることにしたのです。そこで10月のある日の朝、賓館の近くにある双楡樹公園に３人で出かけてみました。多くの高齢者の方がいくつかのグループに分かれて、思い思いの活動をしていたのですが、そのなかで私たちの目を引いたのが社交ダンスをしていた一群の方々でした。太極拳風のものはそれほど珍しくなかったのですが、中国において社交ダンスということが珍しく感じられました（日本でも、その昔は相当流行ったそうですが）。その社交ダンスのサークル（？）の纏め役をされていた方がＳさんでした。Ｓさんは現在63歳ですでに定年退職をした身であること、双楡樹公園の近くに住んでおられて奥さんと一緒にこのグループの纏め役をしていること、この社交ダンスの会は毎週日曜日に行っているといったことをその場でお聞きし、さらにより詳しいお話を聞かせていただくことを快諾して下さった次第です。

こういったきっかけから、私ども３人はそれ以降、数度に渡ってＳさんご本人、奥さん、そして娘さん、の３人の方からお話を伺うことができました。最初は、双楡樹公園で社交ダンスの会が終わった後にインタビューを行ったのですが、その後はお宅にお伺いすることができました。そこで、尋ねてきていた娘さんにもお会いすることができ、お話を伺うことができたというわけです。お伺いした話の内容はすべてビディオ・カメラで録画しましたので、それを見直さないと詳しいことは述べられないのですが、ここでは印象に残ったことを少しだけ紹介してご勘弁を願いたいと思います。

Ｓさんは人民大学を卒業後北京市内にある研究機関に事務員として勤務され、そこを定年で辞められた方ですが、奥さんとの間に３人の娘さんがおられるそうです。私たちがお会いしたのは一番末の娘さんですが、その方もＳさんと同じ職場に現在勤められている由でした。Ｓさんの自宅を訪問してまず感じた印象は、その部屋が比較的広かったことです。すでに子どもが全て巣立っていますから２人で暮らしているわけですが、寝

室が２つあり、居間が２部屋ありました。台所は、ご承知のごとく、大変狭いのですが、それでも年寄り２人の住む部屋としては、中国の住宅事情からすれば、かなり恵まれているのではないでしょうか。もっとも、現在はこの部屋に２人だけで住んでいるのですが、子育ての時期もこの部屋に住んでいたのでしょうから、一家５人が住む空間としてはかなり狭いといえるでしょう。ということは、住宅事情に関しては、中国もその売買が自由でないことから、大きな問題を抱えているように思われます。それは、Ｓさんのように部屋の居住権を買い取ってしまった比較的高齢のひとが比較的広い部屋に住め、本当に十分な空間が必要となる若い世代のひとびとが狭い部屋で我慢をせざるを得ないという矛盾です。



こういった矛盾は日本でも生じているわけですが、日本の場合には土地の値段が高すぎて家（通常、土地と共に売り買いされる）の売買が容易でないということが原因となっていますが、中国の場合にはどうでしょうか。

現在の中国は、経済成長にともなったインフレーションの波に洗われていますが、居住権を取得した定年退職者の年金生活には、少なくとも日常生活に関する限りでは、苦しいということは見受けられませんでした。ただ、問題なのは、いろいろな側面で社会のインフラストラクチャーが整備されていませんから、60歳以降の定年後の生活を何をして暮らすのだろうかと疑問に感じる点です。日本の高齢者のように、気軽に旅行に出かけるわけにはいかないでしょうし、高齢者向けの施設だとか福祉プログラムが行政によってどの程度用意されているか分かりませんが、多くのひとはどのようにして老後生活を送るのでしょうか。いわゆる高齢者の生きがいの問題です。Ｓさんの場合は、例の社交ダンス・サークルの世話役が大きな役割になっているのですが、それがいつまで続くのかは定かではありません。そこで、Ｓさんの場合もそうですが、孫との交流が関心の的となるようです。ところが、これも一人っ子政策の結果、４人の年寄りに１人の孫しかいない勘定ですから、どうなるのでしょうか。Ｓさんの場合には、先にも述べた一番末の娘さんが孫（小学校１年生）を連れて、週末ごとにＳさん宅を訪問しています。これは、その娘さんはＳさん宅からごく近いところに住んでいること、その夫が現在山東省に長期出張中であること、夫の両親も北京市内の比較的近いところに住んでいるので、土日はそれぞれの親元を訪問することになっていること、といった諸条件に支えられて現在可能になっているとのことでした。３人の娘さんのうち、真ん中の方は現在海外に居られるらしいのですが、Ｓさん宅を訪問しているのは、末娘の方だけです。長女も北京市内に住んでいるとのことですが、Ｓさん宅へは特別のことが無い限りやってこないとのことでした。

東京近辺の高齢者と北京の高齢者を、印象において比較してみると、東京近辺の高齢者の方が（たとえば、行政施策等の影響で）より豊かな行動の可能性を所有しているように思われますが、Ｓさんの社交ダンスのサークルのような地域での活動に関しては北京のほうが活発だといえるでしょう。東京近辺では、高齢者が地域社会のなかで北京の高齢者が行っているような素朴な集団娯楽を実行にうつすことはかなり難しいでしょう。

日本も中国もこれから人口高齢化の直接の影響を受けるわけで、それにどう対処していくか、日中間の考え方の違いが鮮明になるようにも思われます。

研究ノート＊＊現代中国の家族と宗族：学生からの聞きとり調査＊＊稲村哲也

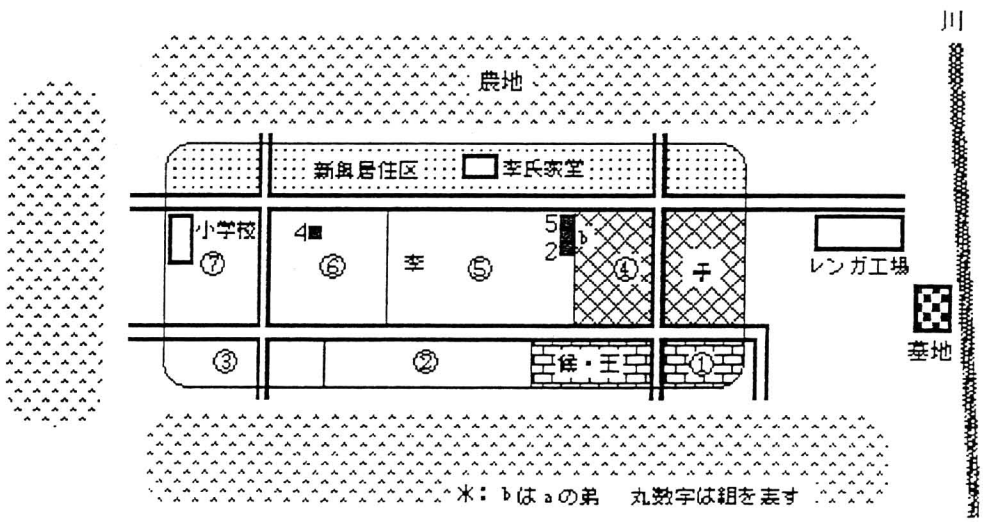
事例１　山東省済寧市汶上県郭楼鎮李村

村の概要（資料1参照）

郭楼人民公社が10年前から郭楼鎮政府と変わった。鎮には李村を含め45村が属している。李村は人口約2,500人の農村で、小麦、トウモロコシ、綿などを栽培。農地は一人当たり0.7畝（1畝=15分の1ヘクタール）が配分される（３年毎に再配分）。農民は、収穫物（小麦）を１畝当たり75kgを政府に売る（市場価格より安値の1.2元／kgで）ことが義務とづけられている。綿はすべて国に売る（4元／kg）。他に１人当たり100元位の「税金」を収める（村の歳入にも一部がまわされ、村の小学校教員の給料などに当てられる）。1970年代に人口が増加したため農地が不足しており、農業だけでは生活が困難。農業人口は約60％だが、若者（20から40代）のほとんどは、村外で、商売（野菜販売など）、運転手、店員、工場の臨時工などとして働いている。

村は李氏が主要な宗族を成し（約1,500人）、他に候（300人）、王（200人）、于（200人）、田（70人）安（2人）の姓がある。村は７組に分かれている。そのうち１組は主として候と王が居住し、４組は于が居住している。他の組は主として李が居住する地区である（その中に他姓も散在する）。各組は300人程度の人口をもつ。

1.李村概念図（現在）山東省済寧市汶上県郭楼鎮李村



宗族

村には李氏宗族の廟（「家堂」と呼ばれている）がある。廟は、「解放」後、小学校として使われてきたが、現在は小学校は新校舎が村の西端に建てられた。村には廟の僧がお

り、被差別階層の「寺守」もいた。また、廟にはかつて、祖先の名を記した位牌や祭具、楽器などがあったが、文化大革命のとき（1970年頃）廃棄された。しかし、３年前、宗族の族譜が改訂印刷され、廟で祝賀が行われた。族譜の再出版の理由は、輩份（４行詩の２０文字を世代毎に順番に個人名の上につけるもの）が次の世代でなくなるため、新たな輩份を創設するためであった。李氏宗族の始祖は山西省から来た李洪基（洪康？）で、李偉から数えて21世代前に遡る。宗族のメンバーは済寧市の範囲内に居住し、1,000家族以上で約2万人である。現在の族長は祖父から地位を継承した若い人（22代）である。

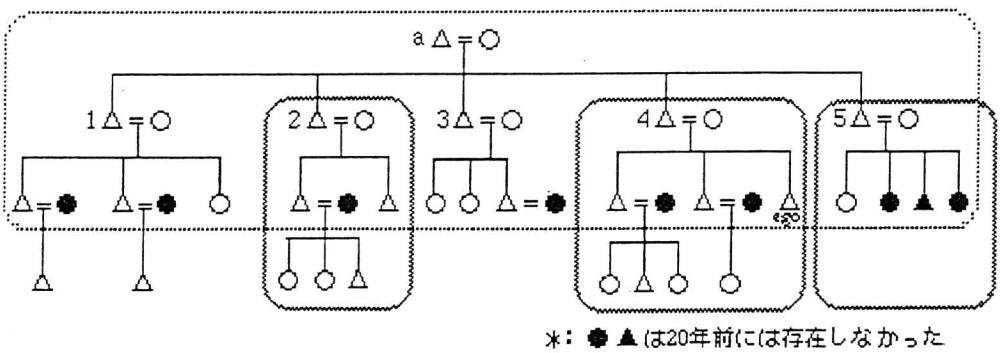
家族

李偉君の家族は今から約20年前には祖父母夫妻とその５人の息子とその妻子が同居する「拡大家族」の形態をとっていた。３世代６夫婦が、家計を共同で営み、共同で食事をしていた。李偉君（ego）は四男夫婦の三男（末子）である。正庁に当たる部屋は客間として使われていたが、春節には裏庭に通じる戸を閉め、そこに絵を掛けて祝った。

祖父（a）は23年前に死亡し、死後3年経ったときに、５人の息子の家族は分かれた。分割後、祖母（aの未亡人）は息子たちの間を回って食事をする「輪流吃飯」をした。

現在は長男家族はハルピンに居住、三男家族も大連に居住している。李村には、次男（医師）、四男（現在は引退）、五男（農業）の家族がそれぞれ独立して居住している。五男は父（a）の死後、母（aの妻）と同居していたため、現在も生家に居住している（ただし、家屋はその一部のみが現存している）。この３家族はいずれも６組に属している（地域的には少しずれている）。

李家構成員　20年前と現在



事例２内蒙古自治区赤嶺市老府鎮管营村四組（旧老府公社山咀大隊黒山溪小隊）

拡大家族の形成

1930年代に蘇鳳鳴君（ego）の祖父とその母（牛姓）が、山東省から戦火を避けて移住した。農業や羊の牧畜を営み、家を建て、祖父夫婦は５人の息子に嫁をとり、２人の娘を嫁がせた。1975年までには、３世代６夫婦で構成される拡大家族が形成された。内底の正庁は食事の場所として使われていたが、正面奥には祖先・神々を祭る絵が掛けられ、

カマドにはカマド神が祭られていた。

旧村の形成・廃村と新村への集団移住

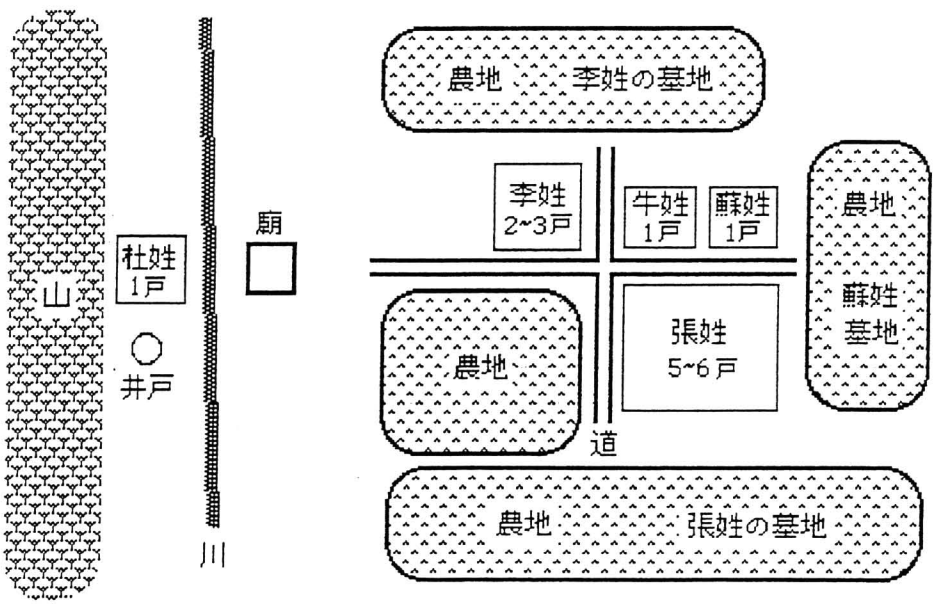
山東省からの移住者は、蘇母子と共に、母の親族である牛姓の人、それに李姓、杜姓、張姓の人々であった。移住した地は山間渓谷で、粟を中心とし、トウモロコシ、少量のモチゴメ、マメなどを栽培し、ヒツジを中心とする家畜を飼って生活した。

1970年代になると、張姓5～6世帯、李姓2～3世帯、蘇、牛、杜姓それぞれ1世帯からなる小村が形成されていた。村の西の川の近くに、各姓共同の廟が建てられ、春節、清明節、盆などが祝われた。また、旱魃時には、その廟で羊が犠牲として捧げられ、雨乞いの儀礼が行われた。

村は、老府人民公社の山咀大隊に所属する黒山溪小隊として組織され、耕地は共有で、農作業も共同で行われた。家畜も共有だった。しかし、1975年頃に家畜は分配され個人所有となり、農地も各個人に配分されるようになった。

1981年、「その場所が山奥で不便で貧しい」という理由で、鎮政府の決定により、全村が南に4キロほどの現在の場所を開拓して移住した。政府からの補助金もあり、新しい村を作るために、森を伐採した。新村は老府鎮に属する老管屯村四組とされた。農業は、コムギ、トウモロコシ、テンサイなどが栽培される。周囲の森林には自由にはいることができず、牧畜が出来ないため、ヒツジ、ウシの飼養は行われなくなった。旧村跡は現在草

旧村概念図（1975年頃まで）老府公社山咀大隊黒山洼小隊



地となり、政府による牧草栽培が行われている。

新村の構成と新たな家族構成

新村には新たな姓が加わり、現在28世帯が住んでいる。旧村居住の家族も分家した。

蘇家を例にとると、祖父（a）は1976年に死亡したが、その後、その息子５人とその妻子は分家した。祖母（aの未亡人）は「輪流吃飯」を行った。その後次男と三男の家族は、同鎮内の10キロほど離れた他村に移住した。長男、四男、五男一家は老管　村四組に居住しているが、それぞれ息子たちが結婚する時代となり、いずれもその長男は分家している。１の末子は独立せず父夫婦と同居しており「直系家族」を成している。この直系家族と分家した長男家族は農業は共同して行っている。

センターの教育を考える＊＊人文学の目的と評価：1995.12.17＊＊三谷博

日本学研究センターにおける論文指導の方針について、若干の意見を申し述べます。今後のため、ご意見を賜れば、幸いです。小論の骨子は、論文の課題設定と評価において、まず問わるべきは、

１）「他者（資料）との直接対話」であり、

２）「独創性」ではない、

という点にあります。

２）について、

実際的理由のほかに人文学の本質について議論したいと思います。実際的理由は簡単で、本研究センターの学生の入学前の素養、およびセンターのカリキュラムが、「独創的」論文執筆の準備には不十分であり学生にとって過酷にすぎるという点に尽きます。

本質論としては、そもそも人文学に「独創性」を求めうるか、求めるべきかという点を考えたいと思います。自然科学の場合、その評価は、理論の深さやカヴァリジのみならず、理論やデータの「新しさ」を基準とする作法となっており、それゆえに激しい競争と知識の累積が制度化されているのは、ご承知の通りです。しかし、人文学の世界に、真に「新しい」ものが存在するのでしょうか。私の経験では、自分の論文の記述内容は９０％以上が既知に属するように思います。私の行っていることは、極々わずかの「未刊行」データの提供と、既知情報の再配置にすぎません。私が「新しい」と思っていても、それは過去の先人にとっては、極く常識的なことに過ぎず、後になって自身の無知に赤面するのは毎度のことです。それでも存在が許されているのは、他に理由があるからに相違ありません。自然科学の世界で、独力で苦心の末、どんなに洞察に満ちた理論や獲得困難なデータを見いだしても、一日遅れれば、徒労に終わるのとは、大変な差があるのではないでしょうか。

たしかに、私は自分の研究が在来知識の単なる繰り返しに終わらぬよう努めており、それを職業学者の義務と感じています。ある論文の批評を書いたとき、そこに記した「新しい」仮説を、その論文筆者に「無断借用」されたときには、あまりのショックに立ち直るまで２年近くを要しました。しかし、その「新しい」仮説も、半世紀前に著され、今は忘れ去られてしまった書物をたまたま見ることがなかったならば、思いついたはずがありません。客観的に言って、材料と解釈のヒントはすべてそこにあり、私は「最後の一押し」

をしたに過ぎなかったのです。このような経験に鑑みると、人文学の歴史は、累積的発展というより、流行と倦怠、退歩・忘却と再発見の繰り返しなのではないかと思われます。人文の学は「新しい」知識の発明や創造というより、人間に関する既知の事実の再解釈、音楽に例えれば、作曲というよりは、既存の曲の演奏という行為に当たるのではないでしょうか。そこでまず問わるべきは、演奏解釈の「新奇さ」ではなく、演奏者と聞き手にとっての「意味深さ」、表現すべき作品と真摯に対峙して自分なりの整合的意味を発見し、それを確かな技術を以て表現して、聴衆に伝えることなのではないでしょうか。

このように考えると、センターの学生の論文に、あまりに「独創性」を求めるのは、不適当に思えます。世界の見え方が変わるほどの「独創性」は凡人には無縁の世界であり、独創性を「新しさ」と限定解釈するならば、解くべきテーマはなくなってしまうのではないでしょうか。とくに、日本の学界の基準を持ち込むと、そうなるのは必然のように思えます。

では、「独創性」に代えて、何を求むべきか。もちろん、日本研究が再開されて日が浅い中国の学界を前提にするとき、中国にとっての「新しさ」の追求や、それによる知識の累積も必要ではありましょう。それは、容易に理解できる事柄です。しかし、私は、もう一点、より大事に思えることを指摘したいと思います。

1）「他者（資料）との直接対話」について

人文学は既知の事実の再解釈であると述べました。しかし、学問と称するには、そこに作法があるように思います。各「学会」仲間の用語・手続きと相互承認は、事実上もっとも有力なものですが、それを貫く、あるいは超える普遍的問題をここでは考えたいと思います。既存知識の引き写しは意味をなさない。引用はその旨ことわり、先人の名を挙げ、典拠を示す。論は整合性を尊び、恣意性を排除する。これらは常識に属しますが、私は、「他者との直接対話」を特に強調したいと思います。

人文学の中には「他者」を自己の思想展開の触媒と位置づけるものもあるかも知れませんが、多くの人文学は、「他者」を「他者」として認識することを、また「自己」を「他者」の眼を通して認識することを、課題としているように見受けられます。

歴史家としての私は、これまで特にこの点に留意してきました。過去に生きた人々の遺した史料に直接接し、「対話」すること、それを職業的使命と考えてきました。先人の解釈をとりあえずスキップし、史料をまず読んで、それを遺した人が何を言おうとしたのかを考えようとしてきました。史料は分からない。分かるものはつまらないし、分かったと誤解しているだけかも知れない。歴史家の頭が動き出すのは、頑として解釈を拒む史料、絶対的な「他者」にぶつかったときなのです。過去の人々は、我々と異なるコンテクスト、異なる環境と異なる心組みの中で生きている。史料の解読とは、その異なるコンテクストを、モデルとして我々の心の中に再現し、現代の言葉で表現することである。これは現代の文学理論では評判の悪い考え方だそうですが、今のところ、私は、これ以外の実践的な方法を知りません。

この「過去の他者」との「仮想の対話」は、「こんな生き方もあったのだ」という新鮮

な、しかし時には不愉快な感動をもたらし、「我々」の生き方の相対化を可能にします。人類学が、これと同じ機能を持つのはよく知られています。人類学は「空間の旅」、歴史学は「時間の旅」を通じて、この想像世界の拡張を行うといえましょう。もちろん、想像世界の拡張は文学においてもっとも大胆に行われますが、我々の学問は、あくまでも絶対的な「他者」を語ること、「他者」を代表するデータを分析・記述することを通じて、行うのが特徴です。

そのとき、もっとも重要なのは、相手ができるだけオリジナルに近いということです。私の経験では、現代語訳された史料は、想像力の飛躍を妨げます。様々な解釈を考えようとしても、訳者によって意味が限定されてしまっていて、できません。実に不自由な思いがします。二次的な史料も、程度は違いますが、同様です。ある人について深く知りたいなら、絵よりも、写真よりも、人の噂よりも、書き物よりも、ヴィデオよりも、その人に直接あって懇談するに限る。その過程では憧れたり、反発したり、好きになってしまったり、いろいろあるでしょう。それと同様に、この仮想の「直接対話」が行うとき、初めて、我々は人文研究の醍醐味を味わいます。これは、純理論研究を除く、ほとんどの社会科学でも同様でしょう。

この点は、外国を研究するとき、とくに重要です。外国人は、近代のナショナリズム世界ではもっとも目に付きやすい「他者」であり、もっとも深刻な問題を起こしやすい「他者」でもあります。研究者として外国を見る場合、既存の眼鏡をはずし、まず相手の人、相手の語りにまず耳を傾けることこそ、必要と言わねばなりません。それが、翻って、「自己」の再発見につながることも再説する必要はないでしょう。中国における日本研究は、この点でまだ不十分の感がします。それには、中華帝国として長い間「他者」を持たなかった歴史、また近代における日中関係など、様々な事情があるのでしょうが、そうした歴史を克服するためにも、相互の「他者との直接対話」を特に強調する必要があるのではないかと考えます。これからの日本研究は、単なる日本紹介でなく、人文学の共通土俵に中国の人々を招き入れ、対等な立場で対話して、「他者」と「自己」の認識を互いに深めあうことに、究極の意味を見いだせるのではないでしょうか。

センターの教育を考える＊＊＊「独創性」について＊＊＊浅野純一

三谷先生の文章に触発され、しかし実のところは、「通信」の編集者の稲村先生に触発されるよう唆されて、学術論文の「独創性」とは何か、とりわけセンターの学生が書く論文にどのような「独創性」を求めるか、あるいはどこまでそれを求めてよいかという、かつてファウスト博士をして悪魔メフィストフェレスに魂を売らしめたと類似する難問を――ゲーテはこの問いを結局のところファウスト伝説という既成の民話の枠組みを借りて「独創的」に展開したのであるが――最近図書室でたまたま眼に止まった花田清輝の文体を無謀にも真似つつ――学生諸子には、このような文体を読んでみることも無益なことではないと言い訳しながら、しかしこの文章を読むより花田本人の文章を読んだほうがずっと得るところが多いことも事実であると忠告しておいて――アルコールに溶け始めた脳味

噌を無理矢理働かせて考えてみようと、思った次第ではある。

結論を先取りして言えば、三谷先生の仰有ることは至極ごもっとも、である。あの老碩学ファウスト博士をして悪魔に魂を売らしめたような問題が、『悪魔のいない文学』（中野美代子）しか持たないわれわれ極東の人間の手におえるはずはないのだから、ひたすら難解な資料に向かい合って対話するしかない、というのはおそらく正しい。

自然科学の「独創性」について、三谷先生は無批判に認めるけれども、それがどのようなものであるかと言えば、たとえば、工業用ミシンの布送り装置の歯車の歯の数は、某某のタイプの機種においては１２枚より１４枚のほうがコンマ何パーセント効率がよいとか（あるいは２０枚と２２枚であったかも知れないが、とにかく私の弟の卒業論文はそうしたものであり、本人の言によれば、それは「いままでにないもの」であった）、帝王切開するとき縦に切ったほうが横に切るよりも予後の回復と次子の出産への影響と患者の痛みを勘案するといささか優るとか、金沢城の蟾蜍は冬眠と夏眠のほかに春眠をするとか（奥野良之助）、といった類のものであって、その「独創性」がどれほど学会で評価されるかということとは別に、実践的には必ずしも一律ではなく、あるいはあまりに微視的でどうでもいいといえばどうでもいい、それが何の役に立つかと言われれば首を垂れるか昂然とするかはともかく、何の役にも立たないと答えるしかないものである場合が多いのだが、しかし「独創的」であることにはちがいないのだ。

ところで自然科学における「独創性」は、要するに新しい事実の発見なのであるが、その評価（どのように「役に立つ」「意味がある」か）は純然たる自然科学に属するのではなく、たとえそれが当の自然科学者の判断によるものであるとしても、判断そのものは社会科学や人文学に属すといえるのであり、そのもっとも典型的な例が、臓器移植とそれにともなう脳死の認定であった。あるいは、金沢城の蟾蜍は採餌においても生殖においてもまったく競争的でないが、これは人をほっとさせる……とか。とすると、社会科学、人文学における「独創性」とは、実は資料の評価ということになるのであろうか。しかしことはそう単純ではないであろう。

なんとなれば、自然科学においても、人の臓器は移植できる、という発見はなにも近代医学が生み出したものではなく、たとえば中国の古典的なポルノ小説『覚悟禅』には犬の臓器を人に移植するはなしがでてくるのだが、――あるいは、人はしばしば心臓に毛を生やしたりもするのだが、あるいは、相対性理論のプロトタイプは老荘思想の中に見いだすこともできるのだが――自然科学が学問であるためには、こうした新しい「発見」よりも、実験と観察、そのデータの解析という手続きが必要であった。その際、実験装置の工夫とか、金沢城の蟾蜍の例でいえば、個体識別するために蛙の足の指を切るといった工夫をするのであるが、論文の「独創性」は、その工夫に大きく依存していることだろう。自然科学においてもその独創性とは、実は新たな事実の「発見」にあるのではなく、事実の証明、これを言葉を換えていうならば、事実を事実たらしめることのその過程にあるので

はなかろうか。それがなければ、つまるところ「発見」でもなんでもないのだった。

ことは、我らが人文学、社会科学もいささか似たところがあって、どの資料をどう並べるか、その資料をどう読むか、にかかっているのであって、結論の独創性など求むるべくもないのがふつうであり、独創的な結論などまず偶然の産物でしかないのではないか。この世に悪魔がいるのであれば、魂を売り渡して美しいマルガレーテと人生を生き直すのも悪くはないかも知れないが、悪魔のいない、そしておそらく神もいない世界に生きる以上、われわれは、ファウスト博士と同じ絶望に屈するわけにもいくまい。

三谷先生の誤りは、難解な資料と対峙しながらそれを読みとくという態度にあるのではなく、そのことに「独創性」を見いだし得ていないこと、言い換えるなら「独創性」を新たな事実の発見と勘違いしたことにあるのであり、その結果「独創性」など不要だという独創的な結論に陥り、２年間のスランプを教訓にできずにいる。

学生諸子には、ふたたび忠告しておくが、私のこのような駄文を読んで感動するよりもまず、たとえばマックス・ウェーバーの「職業としての学問」を読んでみることをお薦めする。あるいは『論語』もよろしい。我終日寝ず食わずして思う、益なし、学ぶに如かず。学びて思わざれば則ち罔し、思いて学ばざれば則ち脆し。

じつは、いずれにしろ、神は細部に宿りたもう、のであった。

センターの教育を考える＊＊＊センターへの提言：1996.1.5＊＊＊三谷博

たった１カ月半の任期が終わりに近づき、名残惜しい頃となりました。まだ、センターの現況を把握できたとは言えませんが、試行錯誤の中で考えたことをメモし、関係の方々のご参考に供したいと存じます。

１）　研究環境の整備。

研究に際しては情報を速やかにかつ大量に入手しうる環境の整備が決定的に重要です。この点、日本の大学は、アメリカやヨーロッパの大学に比べまことに貧弱で、文科系の学問が世界的に見て弱い一因となっていますが、日本学研究中心もまたこの欠陥を免れていません。書物を継続的に蓄積すること、かつ利用環境の整備に特段の配慮が必要です。利用環境の整備は、決定的に重要で、それが出来ておれば、本が少なくてもかなりの仕事が出来ます。実際は、どこでもその逆で、せっかく巨額の資金を投入して本を集めながら、ほとんど利用ができないことがしばしばです。具体的には話は簡単で、入荷した本を速やかに登録・配架し、すぐ探し出せるようにするだけのことです。極めて地味ですが、これなくしては、実際の研究の用にたちません。センターについていえば、登録・配架の点もさることながら、検索に当たって、分類目録はあっても、書名・著者名目録はないのには弱ります。今ある本を探し出すにも、ない本を知るにも、実に困ります。コンピュータでデータベースをつくらなくても、カード目録で十分です（蔵書が少ない内に移行する方が安上がりですが）。インターネットに接続し、それで国内のみならず、日本の図書館にアクセスする計画があるようですが、もとの本の登録・配架と目録がきちんと出来てなけれ

ば、文字どおりの砂上楼閣にすぎません。この点は、私自身、勤務先でいつも頭を痛めている問題ですが、交流基金でも、本の追加よりは、利用可能にすることに、もっとご配慮いただけたらと存じます。

情報環境の整備という点では、もう一つ、学生に対するコピー費用の交付も重要と思います。センターの図書館は、一般の中国の図書館と異なって、利用にお金を取っていないものの、コピーに関しては、日本と比べ、かなり割高のようです。どの程度の補助が適当か、分かりませんが、日本の大学院生と同じ枚数分だけでも、学生にとって、かなりの助けとなることでしょう。

２）　研究者の養成。

センターに学び、修士号をとった学生が、すべて研究者にならねばならぬということはありません。しかし、中国における日本研究の水準を継続的に引き上げ、かつ日本人専門家への依存を軽減してゆくには、優れた研究指導者を育ててゆく必要があります。そのためには、日本の大学で博士号を取得し、自力で研究を続ける術を体得することが不可欠ですが、現在の国費留学生制度はなお不十分のように見えます。帰国してから再留学するまで数年のギャップがあって、その間に折角苦労して身に付けかけた知識と研究感覚を失ってしまうこと、また５人に１人という割合は有能な人材を獲得するには少なすぎるというのが、その主な点です。後者については、私の大学での留学生の様子から判断すると、私費留学の奨励も有効なのではないかと考えます。近年、不況で奨学金が少なくなっていますが、私の大学院への留学生は、ほとんど全員授業料免除を得ており、学生寮に入って、アルバイトもすれば、何とか研究のための時間がひねり出せるようです。国際交流基金が、ここ中国のセンター卒業生を始め、「すでに実績を挙げた学生」を対象に博士課程への奨学制度を設けて下されば、国費留学生ほどの費用をかけずに、優れた人材にその可能性を十全に伸ばす機会を与えうるのではないかと存じます。

３）　日本研究の目標について

先日、中国の日本研究の方向として、１９５０－６０年代のアメリカの地域研究ごときものを目ざす、具体的には、中国人ならではの日本観、日本人やアメリカ人が気づかないような側面の発見がなされるのが望ましい、という考えをうかがいました。この点は、基本的には賛成です。日本の近代史について言えば、スミス、ジャンセン、ドア、クレイグ、アキタといった人々の研究は、当時の日本人の研究をはるかに上回っていましたから、そのような高水準を目指す志の高さは、まことに至当と考えます。また、異文化に育った研究者が内に住む人間の盲点をつくことがあるのは確かで、もともと西洋に関心を持っていた私が日本研究に眼を転じた原因の一つも、ドアさんたちの研究が持っていたそのような魅力にありました。

ただ、当時のアメリカと現在の中国とでは、学界の水準や研究環境があまりにも違い、同一視することは出来ません。アメリカの場合、当時の世界の最高水準が周りにありました。各学問分野についても、地域ごとみても、すぐ隣の研究室に最高の知性がおり、日本

研究者は彼らと対話し、競争しながら、研究を進めていたのです。また、知的構えとしても、データの収集と吟味を大事にし、それを大きな見通しに結びつけるという伝統があり、大戦中「敵を知る」ために動員された人類学が異文化の内在的理解への心構えも用意していました。

これに対し、現在の中国には、それほどの好条件がありません。実際に来て、様々の発表を聞いてみた結果、若い先生たちの中に、日本の水準から見ても、対等に議論できる人が現れ始めていることが分かりました。それはとても嬉しいことですが、しかし、彼らはまだ周囲とは隔絶した存在です。これを、ある程度まとまった集団にするには、もっと控えめな前提から出発せねばなりません。

この点で、社会分野の現代研究と、文化分野の歴史研究とでは、かなり事情が異なるようです。現代研究は、現代語がそのまま使えます。そこでは、特定分野の理論的訓練があり、うまくテーマが設定できれば、データを入手するのも、論文を仕上げるのも易しい。すぐ、特定分野の知識は得られます。その反面、日本社会全体への理解、その文化の内部構造への理解は、本人が異質さへの感受性を育て続けない限り、すぐ止まってしまいます。

逆に、歴史の場合、現代語以外に、もう一つの言語を習得し、かつ現代と異なる社会の組立、文法を理解せねばならないという難関があります。そのため、言葉の面でも、周辺知識の面でも、長い時間をかけて準備することが要求されます。日本人とほぼ対等な博士論文を仕上げた人は、見聞の範囲では、日本語学習を終えて研究生活に入ってから、１０年近くかかっています。

このため、日本の大学院に入って歴史研究をする学生は、母国の研究、あるいは日中関係の研究を選ぶ人が多い。中国語の史料に依存すれば良いからです。つまり、日本語が話せても、日本に留学しても、日本研究はしないわけです。これは、韓国やアメリカの学生とは際だって異なる中国人学生の特徴で、私は、中国人は結局、中国にしか関心がなく、日本を「他者」、歴史と文化を異にする個性と見ていないと、いつも感じています。私が中国と日本の比較を標榜する研究に懐疑的なのは、歴史分野のそれが結局、比較ではなくて中国研究に終わり、日本への、あるいは外国への理解増進を妨げると見るからです。

また、歴史の比較を標榜する研究計画は、まず極めて壮大な観念図式を立て、そこにデータを恣意的に挿入してゆくタイプが多い。これは実際には不可能ですから、必ず途中で挫折することになります。かつてのアメリカのように、具体的データの研究に入ってゆき、そこから初めの図式を大幅に再編成することが出来れば、万々歳ですが、それをやりおおせた人を私は知りません。

歴史の分野で真の日本研究者を育てるには、したがって、もっと控えめなところから出発する必要があります。第一に、高校レヴェルの歴史（日本と世界の両方）、大学教養課程レヴェルの政治学・経済学・社会学・人類学・東西の思想史の知識をきちんと教えること（理想的には、自然科学系をはずして、詰め込み教育をしても、１年はかかるでしょう）。第二に、時代とジャンルを限定して、継

続的に歴史知識を教えること（１年間。この方法では、学生は他のジャンル、他の時代を研究テーマに選べなくなり、１年生と２年生の関係の処理も難しくなりますが、現在、講義内容がバラバラで継続性がないため、学生が論文テーマの選択に迷っているよりは、ずっと良いと存じます。９６年文化の場合、思想史の分野では、明治・近代の宮村先生と近世の渡辺先生が担当されるので、両先生が学生のレヴェルと相互の連絡に配慮されれば、理想的な関係が出来るでしょう）。第三に、テーマは日本語史料を主に使うものに決めること（比較は、常に頭の中でしていることで、ことさらに強調する必要はない。最初はまず、中国と異質な日本のコンテクストを読み解くことに集中しなくては、本当の理解力はつかない。自力で研究できるようになれば、自ずから比較史や関係史は書くようになります）。

編集後記

秋学期授業が終わりになったところで、センター通信がちょうど５０号となったので、ちょっと力をいれて内容の濃いものを作ろうと思いつきました。ちょうど学期末の学生のレポートにも大変面白い内容のものがあったので、掲載させていただきました。この機会に、教官、卒業生、学生と幅広く寄稿していただき、一層の内容の充実をはかり、センター通信を保存する価値のあるものにしていきたいと思っています。

今号には派遣教官による研究ノートものせました。日本学研究センターは今後、教育機関としてだけでなく、「研究センター」としての大きな役割を果たすべきだと思いますが、ささやかながら、そうした方向性を実現するための実績づくりにも貢献したいと考えたからです。

先月中旬、９期生修士論文答弁のあと、三谷先生から「人文学の目的と評価について」というノートが教官あてに配られました。「独創性は必要ない」というかなり挑発的な文章を含んでいましたから、一部でかなり議論が起こりました。そこで、無理をいって浅野先生にコメントをお願いしました。また、その後の議論をふまえて、三谷先生から再度の提言をいただきました。そこには、御自身の歴史学という学問への厳しい姿勢がよく表われており、また、それはセンターへの提言という以上に、歴史学者のありかた自体を問うているように思います。

今年の修士論文については、社会コースでは、オリジナリティーがある優れた論文が多かったという評価で一致しました。中国の状況を念頭に置き、問題意識が明確で、特に仮説の立て方に優れた発想があったからです。検証も確実におこない、日本の学術雑誌に載せられるレベルだと評価されたものもありました。社会科学の基礎がようやく育ってきたという実感を、社会コースの教官は得ることができたように思います。

三谷先生の提言は、理想のひとつの形として、とらえておくことは重要かと思います。しかし、一方で日本学研究センターの実情にそくして、それぞれの分野で具体的に、よりベターな教育システムと内容を考えてゆく必要があります。センターは１０周年となりましたので、ここいらでじっくりと議論すべきでしょう。今回の議論はその発端としたいと思います。

編集担当者は越冬し（といっても一時帰国し、ネパールへ調査にもいきますが）、７月まで滞在します。任務完了し帰国される先生方、おつかれさまでした。お元気でますますのご活躍をお祈りしております。

最後に、事務主任の飛田さんご夫妻、長い間おつかれさまでした。業務だけでなく、私的なことでも大変お世話になりました。ありがとうございました。